

視察報告書

委員会名	建設産業常任委員会					
視察日時	平成27年10月29日(木) 13時30分～15時00分					
視察先	市町村名	男鹿市	人口	29,786人	面積	241.09k㎡
視察項目	水産物の販路拡大に関する調査					
視察参加議員	田原耕一、寺崎強、伊藤千代子、中村進、那須英仁、波多江貴士、藤井芳広					
視察随行職員	友岡卓也					

視察概要

1. 男鹿市の水産業の概要

男鹿半島は三方を海に囲まれた自然豊かな所であり、風光明媚な地形や「なまはげ」などの伝統文化が存在する。平成24年には「男鹿半島・八郎潟ジオパーク」にも認定され、観光と水産の町である。古くから漁業が盛んであり、ここで獲れる県の魚「ハタハタ」は有名で、これを原材料とした「ハタハタ寿司(飯寿司)」や魚醤「しょつつる」は広く知られている。男鹿市は人口約3万人の小さな市であり、近年少子高齢化が急速に進んでいる。周囲106キロの海岸線には、2港湾、3県管理漁港、7市管理漁港がある。

2. 男鹿市の水産業の現状と課題

男鹿市の水産業においては、県内最大の漁場を有しているながら、年々漁獲量が減少していることに加え、魚価の伸び悩みなどが課題となっている。底引き網、刺し網、釣り、定置網漁業により、鯛、ハタハタ、ヒラメ、ブリ、紅ズワイガニ等が漁獲されており、それら5種で漁獲量の51.6%、水揚げ金額で40.8%となっている。漁獲量の合計は3,949トンで県内漁獲総量の31%を占めている。

就業者については、個人経営がほとんどを占め、零細であるほか、漁業就業者の高齢化が進んでおり、後継者の確保・育成が大きな課題となっている。漁業就業者数は493人となっており県内従事者の48.8%を占めている。そのうち60歳以上は348人で70.6%を占めており高齢化の進展は著しい。また、専業漁業者は3分の1程度が兼業と圧倒的に多く、漁業経営のみで生活を維持することの困難さも垣間見られる。

それらの課題に対する取り組みとして、安定した漁獲量を確保するために、資源の回復に向けた種苗放流や、養殖によるつくり育てる漁業の推進を図っている。さらに、所得向上の取り組みとして、甘ダイ、寒ブリ、釣真鯛に大きさや重さ等に明確な基準を設け、産地表示ピンを取り付けブランド化を図っている。それと合わせ、観光協会や飲食店等と、タイの旬の時期に『たいまつり』と称し、タイ飯などの鯛料理をアピールし町全体でブランド化を推進している。しかし、タグのないものと比較し、単価は上がっているものの、漁業者の所得

の向上にはまだ至っていない。

6次産業化については、大型の加工場等ではなく、地域に伝わる伝統料理などに着目し、小さな6次産業を至る所につくる事に視点を置いており、個人に対する支援などを推進する体制の整備を進めている。

後継者問題については、個人の後継者は育ちにくい現状から、まず受け皿となる法人に対して支援を行い、そこで育て、将来的に独立を支援することに力を入れている。具体的には、法人に対し年金・保険の費用として、一人につき月額4万円を助成するなどの取り組みがある。その他では、県の取り組みとして、若者やIターン者に向け、10日間で漁業を体験するチャレンジトライアル事業などを実施している。それらの取り組みもあり、全体では減少している就業者も、20～29歳の階層では平成20年と平成25年の比較で増加している。

意見（本市にとって活用すべき事項・課題など）

本市も、農業・漁業・観光が基幹産業であり、糸島ブランドの推進等、男鹿市との共通点も多い。その中でも見習うべきはブランドタグである。シールとは違い、目に留まりやすく、最終消費者のお手元に届くまで、確実にPRすることが出来る。また、観光協会や商工会等と連携しタイ祭を行うことにより、タイのPRは勿論、6次産業化や観光業の振興に繋がっている。その様に、縦と横の繋がりを持ち、市全体として取り組み、いかに市民一人ひとりに、一番のファン・一番の営業マンになってもらえるかが重要であると考えている。